

温庭筠の「乾◆D29871◆子」について

諸井, 耕二
宇部工業専門学校 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9824>

出版情報 : 中国文学論集. 2, pp.11-22, 1971-05-01. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

温庭筠の『乾牒子』について

諸井耕二

(1)

『新唐書』芸文志に、温庭筠の著述が数種挙げられているが、そのなかに、『乾牒子』三巻の書名が見える。これは当時数多くの有名無名の文人によって制作された伝奇集の一つである。

この書は、著名な詩人の残した小説集として注目されるが、彼の著のほとんどがそうであるように、この書も早く散佚し、『太平広記』などにその一部を記録しているだけで、原型は知るよしもない。巻数も三巻とするもの（『新唐書』・『都京読書志』など）のほか、一巻とするもの（『通志』など）もあって一定しない。

『乾牒子』から出たものとして、『広記』に収められている小説は、次の三十三編である。

- 陳義郎（卷二二） 報応 冤報
- 李丹（卷一七〇） 知人
- 閻濟美（卷一七九） 貢挙
- 鮮于叔明（卷二〇一） 好尚
- 陽城（卷一六七） 気義
- 武元衡（卷一七七） 器量
- 嚴振（卷一九〇） 将師
- 権長孺（卷二〇一） 好尚

『広記』以外では、『重較說郭』に抄録されているが、これは数がさらに少なく、次の十一編を見るだけである。

- 裴弘泰
- 李丹
- 武元衡
- 蕭儼
- 張登
- 鮮于叔明
- 権長孺
- 梅権衡

- 裴弘泰（卷三三三） 酒量
- 苑誦（卷二四二） 譯誤
- 裴樞（卷二四四） 福急
- 鄭羣玉（卷二六一） 嚙鄙
- 王諾（卷二八〇） 夢 鬼神
- 華州參軍（卷三四一） 鬼
- 張弘讓（卷三四四） 鬼
- 梁仲朋（卷三六二） 妖怪
- 曹朗（卷三六六） 妖怪
- 薛弘機（卷四一五） 草木
- 歌舒翰（卷四九五） 雜録
- 邢君牙（卷四九六） 雜録
- 韋乾度（卷四九七） 雜録
- 蕭儼（卷二四二） 譯誤
- 龍又（卷二四三） 治生
- 張登（卷二五七） 嘲諷
- 梅権衡（卷二六一） 嚙鄙
- 道政坊宅（卷三四一） 鬼
- 李僖伯（卷三四三） 鬼
- 寇鄙（卷三四四） 鬼
- 王愬（卷三六三） 妖怪
- 猛嫗（卷三六七） 人怪
- 何讓之（卷四一五） 狐
- 趙存（卷四九六） 雜録
- 嚴振（卷四九六） 雜録

歐陽詢

張元一

蕭嵩

右のうち、「李丹」から「梅権衡」までの八編は「広記」とまったく同じ文であるが、おわりの三編——「歐陽詢」。「張元一」。「蕭嵩」——は「広記」所収の「乾牒子」三十三編のなかには見えないものである。そこで試みに、この三編と内容を同じくするものを「広記」のなかに求めてみると、「歐陽詢」は、「国朝雜記」に出ずとする。「長孫無忌」（卷二四八）なる小説と同じ文章であり、「張元一」は、「朝野僉載」に出ずとする。「張元一」（卷二五四）の冒頭の部分と同じ文章である。また「蕭嵩」は、「譚賓録」に出ずとする。「馮光震」（卷二五九）とほぼ同じ内容のものである。

ところで、宋の呉聿の「親林詩話」には、「乾牒子」に関する記事が二か所見えるが、その一つは「譚賓録」所載の「馮光震」の内容と、「乾牒子」所載の「蕭嵩」の内容とを比べたものである。これによれば、「蕭嵩」はやはり「乾牒子」のなかにはいつていたものであることが明らかであって、これから類推すれば、「広記」に出典を「乾牒子」としない他の二編——「歐陽詢」・「張元一」——も、あるいは本来「乾牒子」に入っていたのではないかと推察される。

ただし、これら「重較說郭」所収の十一編は、いずれもごく短い話であるし、内容も逸話風のものであるから、とうてい伝奇集からの抄録とは思われなもので、偏した選び方であるといえる。清の叢書「龍威秘書」の説乳雜著の部に見られる「乾牒子」は、「重較說郭」所載のものに基づいているが、ここに採られているのは八編で、「重較說郭」に見える十一編のうち

「張登」「梅権衡」「張元一」の三編だけを欠いている。

いずれにしても、「重較說郭」・「龍威秘書」所収のものは「乾牒子」の全貌はもちろんのこと、その一端をうかがうのも適當であるとはいえない。「広記」に収められている三十三編も原著から見ると、ほんの一部かも知れないが、現在すでにこの書が失われている以上、この三十三編にたよるより外に「乾牒子」を知る方法はないわけである。

「乾牒子」に序文があったことは、「唐才子伝」および「直齋書録解題」にその一部らしいものが引用されていることでわかる。すなわち、「唐才子伝」の温庭筠の項には、

乾牒子一卷。序曰、不爵不魃、非魚非炙、能說諸心。庶乎乾牒之義。等並伝於世。

とあり、また「直齋書録解題」の乾牒子の項には、

序言、不爵不魃、非魚非炙、能悅諸心、聊甘衆口。

庶乎乾牒之義、牒與饌同字、從肉見古礼經。

とあって、この二つの文には少しの異同はあるが、これによつて書名も、おいしい乾した牒（あつもの）のように、多くの人によろこばれるものというような意味であることがわかる。

二

前に挙げた「広記」所収の三十三編のうち、後代の叢書類、例えば「唐代叢書」などに入っているものがいくつかある。すなわち、「道政坊宅」が奇鬼伝の「道政坊宅」、「華州參軍」が靈鬼志の「柳參軍」、「王愬」が冤債志の「償債鬼」、「薛弘機」が靈怪録の「薛弘機」としてそれぞれ再録されている。

これらの集にはそれぞれ適当な著者名が冠せられているので、
温庭筠の作として読まれたのではなからうが、ここに挙がった
各編が、人々に好まれた、言わば人気のあるはなしてあつた
と見ることができ、一つの評価のめやすにもなる。

このなかでも、「華州參軍」は、明の陸楫の「古今説海」に
おいて「柳參軍伝」（説淵部別伝家）として独立させられている。

明清の叢書類で独立させられている伝奇集中の一編は、高
名なそしてすぐれた物語であることが多い。例えば、季復言の
「続玄怪録」所収の「杜子春」が「杜子春伝」、牛肅の「紀聞」
所収の「呉保安」が「呉保安伝」、裴鉞の「伝奇」所収の「孫
恪」が「袁氏伝」、張説の「宣室志」所収の「李徴」が「人虎
伝」として広く読まれているのがそれである。したがって「柳
參軍伝」すなわち「華州參軍」をもつて、「乾牒子」を代表す
る一編と見ることができよう。事実、この「華州參軍」は
唐代伝奇を代表する元稹の「鶯鶯伝」や許堯佐の「柳氏伝」な
どを思わせるような才子佳人の物語である。

華州の柳參軍は官を罷めて長安に遊んだが、それはちよ
うと上巳の日で、曲江に出かけた美人の車と出合う。女の
ほうも柳を意識する。これは崔氏の女で、青衣を輕紅とい
った。

女の伯父金吾はむすこの嫁にせひと女の母に申し入れる。
母は承諾するが、女は柳に嫁したいと告げる。そこで母は
輕紅に命じ、ひそかに女を柳と結婚させる。柳は女と輕紅
をつれて人目を避けて金城里に住む。母は金吾に対しては

金吾のむすこが女を盗んだと告げたので、金吾は怒って、
むすこを数十回笞うつ。そして、女を捕えようとしたが見
つからない。

母が亡くなったので、柳と女が喪に赴くと、金吾に捕え
られる。札を経て娶ったと主張するが証拠がなく訴えられ
る。金吾のむすこに嫁せとの判決が下され、女は金吾のむ
すこ王と暮すことになる。その後金吾もこの世を去る。女
は王との生活を喜ばず、輕紅の策謀で抜け出し、柳のこ
ろへ行く。王は再び女と柳を捜し出し訟を起こし女をとり
もどす。柳は江陵に流されるはめとなったが、そのうち女
と輕紅は相ついで病死する。

春二月、江陵の柳生のところへ、女と輕紅が姿を現わし
王と離別したから一生いっしょに暮したいという。しばらく
経つて、もと王に仕えていた召使が、たまたま輕紅を見
またこれが柳の住いであることを知り不思議がる。召使は
都に帰りそのことを王に告げる。王が柳の家へ行くと女の
姿は消える。王と柳はいっしょに長安に赴き墓を開いてみ
ると、女も輕紅も美しく化粧したままで、すこしも損われ
ていなかった。柳と王は終南山に道を訪ね、ついに返るこ
とはなかった。

婢の紅娘の力ぞえて崔氏の女と結ばれる元稹の「鶯鶯伝」と
似かよった部分が前半に多く見られ、その影響が考えられる一
編であるが、全体の雰囲気にはかなり違ったものがある。「鶯
鶯伝」に見られる優艶な情趣は、この「華州參軍」にはほとん
ど見られず、描写よりはすじの展開という面に重点が置かれて

いるようである。このような物語では、情緒あふれる恋の場合を描くことに意が尽されることが多いが、この一編は、二人の男の間を往復する女の運命を描くことに眼目があるように思われる。魯迅は「中国小説史略」で、「乾牒子」を次のように評している。

温庭筠にも「乾牒子」という小説三卷があつて、遺文は「広記」に見えるが、ただ事略を書きししたものであつて、簡単に大したものではなく、その詩賦のつやのある美しさとは似合わない。(唐の伝奇集と雜俎)

やや手きびしい評であるが、「ただ事略を書きししたものである」という言は、この「華州参軍」、さらにはこれから述べる他のいくつかの編の、すじのめまぐるしい展開に特徴があることを指摘していることにもなるわけで、一つの適確な見方であるにはまちがいない。

「鶯鶯伝」を思わせる優美な小説の一つとして唐末の皇甫枚の「非煙伝」(「飛煙伝」とも書かれる)を挙げることができる。臨淮の武公業の愛妾非煙と隣家に住む青年趙象の恋物語で、その恋を知った武公業が非煙を責め、ついに死に至らせるという話で、すじはごく簡単なものである。当時の小説のなかでは比較的長いこの物語の大半を占めるものは、趙象と非煙とがたがいに思ひのほどをうちあける詩や手紙であつて、それらの美しさがこの一編の生命であるといえる。すなわち、物語性よりは詩文の美のほうに力が注がれているわけで、この「華州参軍」とは対照的な位置にあるものといつてもよいだろう。

あの繊細で華麗な詩や詞を残した温庭筠の書いた小説が、美

しい描写に乏しいということは不思議でさえある。しかし、本来、詩と小説とは違った発想や構成の上に成り立つものでありこのようにすじの展開、すなわちストーリー性に重きを置いた物語を創り出す力を兼ね備えていたということは、温庭筠の文学者としての他の一面を示すものであり、注目されることである。このように「華州参軍」は、すじの展開にその特徴があるとすることができ、しかしこの物語は、前に述べたあらすじでわかるように、それほど興味的に繰りひろげられるわけではない。才子佳人の物語だということで、深い理由もなく、むかしの人々には好まれたのであろう。

「乾牒子」三十三編のなかには、「重較説郭」に収められているような、逸話を紹介したごく短い話など、現在の小説という概念にはあてはまらないものも多く入っている。しかし、「陳義郎」「竇父」「王諸」「薛弘機」「何讓之」などの諸編は、比較的長くもあるし、小説としての結構も備えており、現在読んでも十分におもしろいもので、これらの諸編を含むがゆえに「乾牒子」は、唐代伝奇集中において特異な地位を占めるものであるといふことができる。

三

「陳義郎」はつぎのような内容の物語である。

陳彝爽と周茂方は同郷の親友で、三郷で学業にいそしんだ。陳は登第し妻も迎えたが、周は成功しない。天宝中、陳は蓮州儀隴令に任せられたが、母は家を離れたがらない。妻が縊で母の衣を作るときに、はさみで指を傷つけ、衣を

血で染めてしまふが、母に記念の品として残して行く。

時に陳の子義郎は二才であつた。陳は周に同行するよう頼む。途中道の峻険なところにさしかかった時、周は家来たちを先に行かせ、金鎚で陳の額を碎き急流に突き落す。馬が足を踏みはずし陳は死んだとし、誰にもわからないはずであるから、自分が陳とすりかわろう、そうすれば皆にとつて幸せであると周はもちかけ、今まで持てなかつた官職と妻とを同時に得る。一年の後、周が妻に「吾が志は已に成つた。誓つて背いてはならない」といつたので、妻は恨みを抱いた。

二度移官するうち、十七年経過した。周は十九才になつた義郎を孝に応じさせるため洛陽に伴う。周は北路をとり、義郎には南路をとらせた。義郎は三郷に寄り、そこで飯を繋ぐ老女に会う。老女はしげしげと見て、わが子によく似ているといい、血に汚まつた衣を贈る。

義郎は翌年下第して帰り、母に衣を見せる。母は驚き、すべてを語る。義郎は周の寝こみを襲い首をあげる。首を携えて官に自首したが、官はこれを義として罪をゆるす。母は姑に会い涙にくれる。

この一編もすじの展開に重点が置かれており、そのおもしろさによつて支えられている物語である。推理小説的に首尾を一貫させ、よくまとめられている。なお、この「陳義郎」は、「原化記」から出るとする「崔尉子」（太平広記巻二二）と構想やすじの展開がまったく同じである。「原化記」は、「重較說郭」に作者を皇甫氏とするが、その名前も伝記もわからないので、

この二つの作品がどこでどう結びつくのか手がかりがない。いずれにしても、この二編は深い関係にあるものと考えられる。

「王諸」も小説としての結構を十分に備えた一編である。

王諸は臨邛刺史崔勸の甥で、その幕下に在つて、蜀と長安を往復し、政府の役人と情報交換する仕事に従事してゐた。長安の一役人からその長姉の一人娘陳氏を娶るよう勧められ、そのことばに従う。二年経て王は妻を伴い蜀に帰る。伯父に報告するが、伯父は自分の娘を娶れという。陳氏も納得し、崔氏を夫人としていっしょに暮すことになる。

伯父は王と自分の息子（崔氏の兄）に命じ、江陵に下らせる。三月のことであつた。その五月、伯父は江陵に移るこゝとなり一族を挙げて揚子江を下つた。王たちは一宅を準備し到着を待った。

王は白昼夢にうなされる。陳氏が髪をふり乱して「三峽を下る時、舟中で沐髪していたわたしを崔夫人が激流の中に突き落したので。」と告げ涙をとめどもなく流す。崔氏の兄も同じ夢を見たという。さらに、その夜二人とも再び同じ夢に責められる。

数日後、陳氏が三峽で溺死した旨の知らせが届く。到着した崔氏を兄は責める。崔氏は髪を断ち死んで行き、王は他処に蕩遊する。

数年経つたある日のこと、王は夏口の水軍の陣営で陳氏によく似た女を見かける。それはこの世にいないはずの陳氏だった。そして王に次のように語る。「崔氏が押したの

ではありません。三峽でわたしがうつつかり足を踏みはずしたのです。三日めに川原に流れついたので水軍の少将が発見し奇跡的に助かったのです。少将の厚恩に感じ、その妻となり今では二人の子供の母です。」と。

王は崔氏に罪を負わせたことを恥じ、羅浮山に入り頭陀僧（托鉢をする僧）となった。

この物語も場面や人物をくわしく描写するようなことはほとんどない。つきからつきへと事件を展開させるところに眼目があるように思われる。したがって、魯迅が言うように「ただ事略を書きしるした」だけのものではないと言ってしまうことができるかも知れない。また、これに肉付けをするならば一編の長編小説にもなるとすることもできる。だが、そこには小説の一つの大切な要素である物語性が十分に備わっているわけだ。ここに注目してみる必要があるであろう。

この一編は、『広記』では夢の部の鬼神のところに分類されている。一種の不思議な話、夢にまつわる怪奇譚として扱われているのであろうが、現在のこの物語を小説（現在の概念での）として扱っても十分に通用しそうに思われるのは、その怪奇譚的要素があまり感じられない——むしろそれを否定しているような感じさえするところから来るものである。

唐代の伝奇小説は、超現実的な世界を描いたり、不思議なものや題材にしたりすることがはなはだ多い。唐代伝奇が「搜神記」などの六朝の志怪のあとを継いで現われたと見られる以上これは当然のことであろう。志怪が見聞した不思議な話をそのまま事実として書きとどめたのに対し、伝奇は作者が意識して

創り出したものであるところに大きな違いがあるとするのが定説となっているが、題材においては両者に共通なものが多く、したがって、怪奇譚が大きな比重を占めているのである。

ところが、唐代伝奇のいくつかは、その怪奇的な性格をまったく持っていない。このような物語の存在は、『世説新語』を代表とする、いわゆる志人小説の流れの上で考えたり、史伝の延長として位置づけてみたりしても、十分に納得できる説明はできそうにもない。

この点について、前野直彬教授は次のように述べておられるが、妥当な説明といえよう。

伝奇の傾向がもっと徹底すれば、怪異の要素を一つも含まずに、一組の男女の恋物語など、現実に起こった、または起り得る事件が題材とされるようになる。これらは人間について書いているのだが、逸話集でもないし有名な人について話でもない。志人小説につながるとはいえない。やはり志怪小説が伝奇へと展開する過程で、作者の目が現実の世界における小説的な事実へも向けられるようになったのだと解釈すべきであろう。

「華州參軍」では、おわりの部分で、墳墓に眠っているはずの女と青衣が現世の人間と生活を共にする話となり、怪奇の要素が認められる。しかし、「陳義郎」にはそうした面はまったく認められないし、「王諸」は夢の不思議さを述べているように、実はそれを否定しているような話である。この二編は、数奇ではあるが、現実に起り得るかも知れない人生の一断面が題材となっているのであって、意識して物語を創り出すという

傾向が徹底したところに成り立ったものと位置づけてよからう。怪奇的な要素をまったく含まない伝奇としては、「鶯鷲伝」「李娃伝」「柳氏伝」などを挙げるができるが、これらは唐代伝奇の精隨であり、当時から単行されて広く読まれた作品とされている。戴孚の「広異記」をはじめとし、牛僧孺の「玄怪録」、李復言の「続玄怪録」、裴鉞の「伝奇」を代表とする中晩唐の伝奇集は、そのほとんどすべてが、不思議な話で占められている。やつと小説の世界にも、人間、さらには人生への関心が芽生えはじめていたのに、六朝志怪の世界へ逆もどりしたような観を呈することになったわけで、このような状況のなかにおいて、「乾麩子」の幾編かは貴重な存在といえると思う。

四

もちろん、「乾麩子」のなかにも、怪奇を伝えることを眼目とする編はいくつかある。凶宅かどうかを李章武がたしかめる「道政坊宅」、妻の体の半分が忽然と消え失せる「張弘讓」、夜空を飛ぶ姿のない妖怪にみられる「梁仲朋」などがおもしろいが、比較的長く内容も整っている「何讓之」「薛弘機」をこの種を代表するものとして挙げるができる。「何讓之」は当時ほかにも類の多い狐のはなしである。

廬江の何讓之が洛陽に赴き、上巳の日、漢帝の諸陵のあたりで陽春の華やかな風景を眺める。一陵上に一翁があつて詩を吟じる。何が近づくと、翁は陵中に姿を消してしまふ。何がそのあとから入ると、翁は狐の姿と化している。尾のあたりに火焰が流星の如く燃える。何は机の上に置い

てある一帖の文書を発見する。「応天狐超異科策八道」と題してあるこの文書を獲て丘穴から出る。

数日の後、一人の僧が何を訪れ「あの文書は君には必要でないものだ、留めれば不祥なことが起こる、これを三百縑で買いたいという人がいるが譲ってくれるか。」ともちかける。何はそれを承知するが、あざむいて三百縑を手に入れて、文書は渡さない。

一か月の後、何が弟に自慢してこの文書を見せ、弟がこれを何の前に投げ出すと狐と化し、さらに美少年と変わって白馬にまたがり南を指して走り去る。

ちようどその頃、内庫で絹三百匹が盗まれたが、役人の捜査によって、何のもとにあることが判明する。何は言い開きができず、刑に処せられる。

この物語は、狐の文書（四言詩二編）を中心に、狐のもつ不思議な力を描いたものであるが、だまし取った絹のために捕えられるという結末の部分がおもしろい。怪奇によって人を驚かせるといふよりは、これもすじの展開で読ませる物語である。

なお、この話には、縁（きぬ）がすじの展開の上になつた役割を果しているが、同じく縁が話のきめてのように扱かれているものにして述べた「陳義郎」がある。この作者は好んで話のなかに縁を用いていることは、他に「陽城」（夏陽山に隠れ住み、ひたすら詩書の講論に明け暮る高潔の人陽城をめぐる物語。山東の諸侯がその高義を聞き、五百縑を贈ったが、家の片隅に放置したままで発くことがなかった。）、「閻濟美」（詩人閻濟美が三たび挙に応じ登第するまでの物語。囊中にただ五縑しか持たず洛陽で挙に応ずる。）にも見る

ことができることとわかる。

「薛弘機」は、前にも述べたように、後には「靈怪録」のなかの一編として読まれた物語である。

洛陽に隠士薛弘機が住んでいた。ある秋の日の夕方、一客の訪問をうける。姓名を柳蔵経といい、住いは遠くないが、学問の上の交わりを結ぶために特に訪ねたという。蔵経が易経について尋ねると、詩書礼楽および春秋は明かにするが、易は学んだことがないといひ、いずこともなく姿を消す。

一か月ばかり経て、また訪ねてきたとき、茨が近づこうとすると退き、これに迫ると朽薪の気が鼻を衝いた。次の年の五月にまた姿を現わし、薛に一絶を贈る。その夜暴風が来て、家や樹を吹き倒した。魏王池畔に在った大きな枯柳も吹き折られ、その中に百余卷の蔵経があるのが発見された。激しい雨のためにほとんど読めなくなっていたが、ただ易経だけがないことがわかった。

この物語も、すでに述べたいくつかの編と同じように、話の結末——説きあかしの部分におもしろみがある。また、この編には柳蔵経が五言絶句二編を吟ずるところもあって、話に風格をもたせようと努めているのがうかがえる。

五

「竇父」は、三十三編のなかでもっとも長い一編である。物語の内容も特異である。この編は、『広記』巻二三四の治生の部に入っている。治生の部にはこの編を含めて、四編が収めら

れている。他の三編は、『御史台記』から出た「裴明礼」と「朝野僉載」から出た「何明遠」「羅業」であるが、これらはごく短いものである。話の内容は、四編ともに目先をよく利かせ、人の気づかぬもつけ仕事をやったり、普通の人ではやれない職業にたずさわったりして、巨万の富を致すという話である。なかでも、この「竇父」は、莫大な利益を得るはなしが、つきからつきへと紹介されており、この種のものでは頂点に立つものといえよう。

富を致す話は、『乾牒子』のなかにも一編ある。「王愬」がそれで、女巫や神巫が活躍する一種の怪奇譚である。この一編は、構成の上から三部に分けることができるが、その二番目の部分が、富を得るはなしになっている。「竇父」の主人公竇父は長安の西の扶風の出身とされるが、この「王愬」の中心人物は王愬の妻で、これまた扶風の生まれである竇氏である。竇氏は不思議な能力を持つ女巫包九娘の指示によって、財を貯える。足を患う二水牛を安く買い、急に二牛に死なれた粉ひきの家が高く売れる話、五六斗の土が盛れる竹のかごを無数に作る下次の年の春広陵城が構築されることになり全部買いつつもらえる話、邸宅を高く売れるとき手ばなすと、後にその場所は広陵城が築かれるため半額で買いあげられることになった話が書かれている。最初の水牛のはなしは、唐代伝奇の代表作の一つに挙げられる沈既済の「任氏伝」で、狐の化身任氏が夫に股に疵のある馬を買わせ金もつけをさせるといふ一段を思わせるものがあるが、これと同じようにここに語られる三つの話は、それを見とおす超人間的な力を持つ不思議さを示すものであること

を忘れてはならない。このような内容をさらに一步推し進めて、靈力によらないで、人間の知恵と努力と幸運によって富を獲得するような話に発展させたものが、治生の部に集められている。「竇又」をはじめとする諸編であると思われることができる。扶風の竇氏の話を竇又の話の原型として見、そこに怪奇譚から、現実の世界に起こり得る事件を描く小説への道を考えてみることもできると思う。

「竇又」は前に述べたように富を致すはなしであるから、そのあらずじはごく簡単である。子貢のように殖貨の遠志を抱く十三歳の竇又が莫大な財貨を残して八十余歳で世を去るまでの金もうけのはなしが書かれているのであるが、その一つ一つの方法はこみいっている。以下、話の順序にしたがってその手段を羅列してみる。

安州長史だった伯父からもらった糸履（糸で編んだくつ）一輛分を売って、二本の鋭い小鍔（すき）を作る。長安の街に飛ぶ榆莢（にれの実）斛余を集め、勉強すると称して借りた廟の庭を鍔で耕し榆莢を蒔く。三尺余に伸びたのを間びいて薪百余束を得て、これを売った。翌年も二百余束を得て数倍の利を取めた。五年めには大きく成長したもので椽（たるき）を作って売る。庭に残った千本あまりは車乗を作るのに用いた。

蜀の青麻布を求め四尺に裁ち小さい袋を多く作り、また麻鞋数百輛を買い、長安城中の少年を集めて、日に餅三枚と錢十五文を給し、袋に街路樹である槐の実を拾わせた。同じく少年に破れた麻鞋を拾わせ車三輛分を新品一輛の割

で換えるとした。集まった鞋を人に洗わせるいつぼう、瓦礫も買って、それらをきざんだり砕いたりし、それに槐の実と買った油靛（油性の藍染めの染料）を加えて固め、径三寸長さ三尺のものに作り法燭と名づけた。都に大雨が降り東馬が通ぜず燃料の供給が絶え燃料も湿って役に立たなくなったときこの法燭を売り出し無窮の利を得た。

長安市の南に下水の流れ入る湿地を買い、そこに柱を立て的をつけ、子ども呼び集め、瓦礫を投げて的に当たれば煎餅や団子を与えたとした。争い投げる瓦礫がこの地を埋め立派な土地となったので、ここに店舗二十間を作り、日に利益数千を取めた。（これによく似た話が、前に述べた治生の部の一つ御史台記に出る「裴明札」のなかに見える。次のような内容である。長安金光門外に不毛の地があり瓦礫が多かった。そこで片隅の的を立て筐を掛けて当たったものには錢を与えるとした。人々が争って拾って投げるのでやがて瓦礫は尽きてしまった。ついで牧羊者を住ませ羊の糞が積もったところで集めた果核をまいて牛を使い耕すと一年あまりで果樹の茂る立派な土地に変わった。）生活に苦しむ胡人に長い間錢や絹を与えていた。その胡人に恩がえしにと、一邸宅をかうことを勧める。邸内にある石が実は名玉であるというのである。玉工に見せると奇貨であると驚く。これで各種の装身具などを作り、大きな利を得た。

一宅を買い手入れをし、ほしがる隣家に住む大尉にこれを寄贈する。西市の巨万の富を誇る商人五・六人に子弟を

要職につけてやろうともちかけ、大尉に頼んで実現させ謝礼を得る。

生長しすぎた一大木の処置をうまくやってのける。謝礼を得るとともに、木のほうは梢と根とから二尺ずつに切らせ木材として売り、幹で陸博局(すごく盤)を数百作って売った。

以上のような話であるから、この主人公竇又の身分な商人―庶民であるかのような印象を与えるがそうではない。「諸姑は累朝の国戚」であり、「伯父は檢校工部尚書」であったというから、高貴な身分の出身である。しかし、物語の内容は長安の身分の市井の話であり、いわゆる、金もつけ」が主題となっているので、庶民的な色彩の濃いものとして注目されるのである。前にも述べたように、超現実的な力によるのではなく、人間の能力で話を展開させていく点も、この物語を唐代伝奇のなかにおける特異な存在としていえると思う。

また、唐代伝奇が作られるようになった主要な原因に、商業経済と都市生活の発達を挙げる学者もあるが、この物語は直接そのような面を反映しているものとして、その観点からとりあげてみることもできよう。

六

三十三編のうち、いままで、まったく触れなかったものが半数以上もあるが、これらはごく短いものであったり、小説とはいえない内容のものであったりして、とくに説明する必要があるなかったからである。

いわば、これらは六朝風の志怪小説あるいは志人小説のようなものであるが、「乾驥子」に限らず、唐代の伝奇集にはいろいろの傾向の作品が雑然と集められている場合が多い。伝奇という名前で呼ぶにふさわしい堂々たるものもあるいつぼう、ほんの二・三行の話や有名人のちよつとした逸話を記しただけのものがそれと肩を並べているような有様である。もちろん志怪とも伝奇とも区別がつかないようなものもあるわけで、伝奇集にはそのようなものもつとも多いのが実情である。これらのうちから、どこかに唐代伝奇の特徴をもつものを選び出し、系統づけることが、唐代伝奇集研究の基本的な作業でなくてはならない。そういう観点から、ここに「乾驥子」のなかからいくつかの編を選び検討を加えたわけである。

ここで比較的くわしく説明した六編の物語をとおして、「乾驥子」の性格を結論的にいうと、変化ある物語、興味ある話を創り出そうとしている点に、唐代伝奇としての特徴が明かに認められるということになる。

温庭筠の詩あるいは詞に親しんだ目でこの「乾驥子」の諸編を読んでいくと、雰囲気がまるで違うのでとまどいを感じる。彼の詩詞とこの伝奇集との間になにか関係がなくてはならないと、温飛卿詩集および花間集などに見える詞を、「乾驥子」の諸編を頭に置いた上でもう一度たしかめてみた。しかし、彼の優麗な韻文にふればふれるだけ、両者の距離は広がるばかりで、接点を見つけることはできなかった。

ただ、詩集によると、袁郊および段成式と詩の贈答をしたことがわかる。この二人の散文作家と親交があったということに

なるが、この事実は注目してよい。

袁郊は詩も書いているが、「紅綾」で有名な伝奇集「甘沢謠」を残しており、伝奇小説作家として著名であった。段成式には「酉陽雜俎」二十巻続集十巻があり、現在完全な形で伝えられている。「酉陽雜俎」はめずらしい話を書き集めたものであるがそのなかには伝奇小説のなかに入れてもよいものがかなり取められているし、後世には他の伝奇集から抜いて作られた「劍俠伝」という偽作の作者とされていることなどわかるように、伝奇作家として扱われても不思議ではない存在であった。このような人々と親しく交わった温庭筠がその影響もあって、伝奇集を書いたと考えることもできよう。

温庭筠と「乾牒子」の諸編との結びつきがこれ以上は考えられないので、果して現在残っているものがほんとうに温庭筠の手になるものかどうかという疑問が最後に残るのであるが、温庭筠の「乾牒子」という書名がすでに「唐志」に記録されており、また宋のはじめに編修された「広記」に「乾牒子」から出るとして収録されているというので、そのまま信じるよりはりはかはない。

註

(1) この編は原闕出処。人民文学出版社版「広記」によると、清陳鱣校本に出処を「乾牒子」とする。なお、明沈氏野竹齋鈔本には「因話錄」に出るとする。

(2) ただし、「裴弘泰」の一編は、内容は「広記」と同じであるが、文章がところどころカットされ短くなっている。

(3) 「譚賓録載唐率府兵曹參軍馮光震入集賢院校文選、注蹲鴟云、今之芋子、即着毛蘿蔔、又温庭筠乾牒子所載不同云、蕭嵩以文選是先代旧書、欲注蹲鴟云、今芋子乃着毛蘿蔔、未知孰是」(觀林詩話)

(4) 「説郭」卷三に見られる宋の馬永易の「実資録」には、「乾牒子」から採られたものが二編載っている。この「実資録」は、古人の殊名別号を採録したもので、一編は「張大夫」という名称で「広記」に見える。「孟嬪」の話が要約されているが、他の一編は「右祭主」という名称についての話であって、これは「広記」にも「重較説郭」にも見えぬもので、失われた編の一つであろう。

(5) 岩波文庫「中国小説史」上(昭和三十七年改版)増田涉訳による。人民文学出版社版「太平広記」によると、出典を「原化記」とするものが五十八編あり、出典を「原仙記」とし明沈氏野竹齋鈔本に「原化記」と作るもの三編、出典を「化源記」とし同鈔本に「原化記」と作るもの一編、出典を「纂異記」とし同鈔本に「原化記」と作るもの一編、出典を「狐書」とし同鈔本に「原化記」と作るものをそれぞれ加えると、計六十三編となる。また、「原化伝拾遺」を出典とする一編(蚕女・卷四七九)も普通「原化記」に入れている。これらの各編と「乾牒子」とのつながりは、「崔尉子」以外は特別には認められない。

(7) 平凡社版中国古典文学大系「六朝・唐・宋小説選」解説。

(8) 宋の呉棗の「觀林詩話」に、温庭筠には「狐書」二編があるとしてこの四言詩二編を紹介し、これは「乾牒子」に見えると説明している。二編の字数は「広記」の「何讓之」中のものと同じであるが、語にかなりの異同がある。なお、この二編は、「全唐詩」第十二函第七冊に、「原陵老翁吟」として、やはり「何讓之」に見える他の詩二編とともに、収録されている。

- (9) 「唐詩紀事」「閩濟美」の項と同じ内容の話である。「全唐詩」第五函第二冊に、この話に出てくる二編の詩が「下第獻座主張謂」「天津橋望洛城殘雪」と題されて収められている。閩濟美の詩はこの二編以外には記録がない。
- (10) この物語のなかに出る二編の五言絶句は、「全唐詩」第十二函第七冊に、「柳藏經二絶句」として収められている。
- (11) 平凡社版中国古典文学全集「月報一八号」に、石田幹之助博士が「寶又の致富譚」という題で、内容を紹介されている。
- (12) 李長之、「中国文学史略稿」第三卷 第九章唐代的伝奇文学 第二節伝奇文学產生原因的再探討—兼論伝奇文学的一般特徴 で述べられているのがこのような論の代表的なものである。
- (13) 「温飛卿詩集」卷六に「開成五年秋、以抱疾郊野不得与郷計偕至王府將讓返適隆冬自傷因書懷奉寄殿院徐侍御察院陳李二侍御回中蘇端公鄂鼎韋少府兼呈袁郊苗紳李逸三友人一百韻」と題する詩がある。卷五の「経故翰林袁学士居」と題する七言絶句は袁郊の住いを歌つたものと思われる。
- (14) 「唐詩紀事」卷六十五の袁郊の項には「与温庭筠酬唱庭筠有開成五年抱疾不得預計偕計寄郊云逸足皆先路窮交独狗向隅是也」とある。「温飛卿詩集」には「和段少常柯古」「答段柯古見嘲」「和周諶広陽公宴嘲段成式詩」があり、段成式には「寄温飛卿牋紙」「嘲飛卿七首」「柔卿解籍戲呈飛卿三首」がある。
- (15) 「全唐詩」第九函第七冊に、月・霜・露・雲と題する四首の七言絶句が収められている。
- (16) 「広記」に八編が収録されている。